

**第3回昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画策定委員会
議事要旨**

< 日 時 > 令和6年9月4日（水）18：30～

< 場 所 > 昭島市役所 庁議室

< 出席者 >（敬称略）

【 委 員 】

松本 祐一（会長／多摩大学経営情報学部教授、多摩大学総合研究所所長）、北村 実（副会長／あきしま・街づくり市民会議・なかがみ会長）、秋山 伸子（昭島ボランティアセンター運営委員、民生委員・児童委員）、伊藤 正人（昭島市消防団団長）、岩下亮平（社会福祉法人 昭島市社会福祉協議会地域支援係長）、大山 弘一郎（OK プロジェクト実行委員会メンバー）、高田 英梨紗（昭島市リーダーズクラブ（ALC）代表）、高橋 靖和（昭島市自治会連合会会長）、倉持 伸江（東京学芸大学教育学部 生涯教育分野 准教授）、来住野 清子（公募市民）

【 事務局 】

枝吉 敦子（市民部長）、山田 恵理（生活コミュニティ課長）、伊藤 奨（市民活動推進係長）、若名 高彰（市民活動推進係）、永瀬 万愛（市民活動推進係）

【 傍聴者 】

2名

< 配布資料 >

—机上配布—

- ・資料1 昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画（案）
- ・資料2 第2回昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画策定委員会議事要旨

< 議事要旨 >

1 開会

【 事務局より連絡・報告事項 】

2 議題

(1) 計画の構成案について

【 事務局より計画の構成案について説明 】

【 質疑 】

委員長：

前回、構成について皆さんから多くの意見をいただいた。流れがわからない、総合基本計画との繋がりが唐突、というような意見があったことを踏まえて、構成を修正した点について説明があった。事務局提案についてどうか。

副委員長：

市民アンケートの記述部分が量的に多いと感じる。確かに課題であるため、ここに出てきているのだと思うが。課題をもう少し集約、整理して、コミュニティに期待することはこのようなこと、課題はこのようなこと、というのがコンパクトにまとめられた形がいいのではないか。

また、冒頭の部分、コミュニティというのは主体的な関わりを持つ個人なり団体なりが繋がっていくということだと思う。主体となる個人がどういう関わり方をするものなのかが出てきていない気がする。主体となる団体というのも、周りから言われてそれに従っているような、行政の下請け機関みたいな形ではない。主体となる個人とは、要するに活動の中でどういう関わりをする立場の人、ということが出てくる必要があるのではないか。

委員長：

具体的には、どのあたりに出てくるといいと思うか。

副委員長：

具体的な提案はできなくて申し訳ないが、「多様な主体の現状と課題」というところ。あるいはその課題のところ。会員の減少と人手不足というのがあり、役員のなり手がいないところがある。それと合わせて、活動への関わり方として、お客さんとしてではなく、その活動に主体的に関わり推進していく人たちの拡大、そういった人たちの存在が必要になる。その広がりコミュニティの繋がりという形になっていくのではないか。

委員長：

課題のところでは主体性の発揮や、そういう人が増えていかないといけないということが、記述としてあった方がいいというご提案かと思う。

大山委員：

前回いろいろ指摘があった中で、大幅に変えていただきありがとうございます。流れは、前回議論した内容に沿っていると思うので、特段問題はないと思った。アンケートは確かにページ数を割いているが、基礎資料となる大事なものとなると載せざるを得ないかとも思う。また、多様な主体という表現をしていることで、地域団体など、団体の数も入っていることでわかりやすくなっただけで、その分ボリュームが増えたと思った。見やすく、とても参考になったので私はよかったと思った。流れとしてはいいと思っている。

倉持委員：

構成としてすごくわかりやすくなったと思う。最初の大きなⅠのところでは概要や枠組み。Ⅱのところでは現状と課題。現状と課題を、一般的なデータ、社会情勢のデータ、市民調査アンケート、各種団体の紹介というところから押さえて、その上でその政策を進めていくための考え方ということで、大きなテーマと4つの考え、施策の体系、具体的な施策という感じでわかりやすい。ボリュームについて、調査は参考資料として後ろに持っていくというやり方もあると思うが、このようにデータがあって述べられているということでわかりやすいと思った。

大きな構成はこれでいいと思うが、細かいところについて。Ⅰの(4)、「本計画におけるコミュニティの定義」がわかりづらい。この計画の対象は主体だが、主体の説明なのか、主体の範囲なのか。繋がりとは、この計画のもうひとつの大きなテーマだと思いが、繋がりというのが何を指すのか。複数の捉え方があると思うが、そこも説明するのか。Ⅰの(4)で範囲を示したり定義をしたりするのは大事だと思うが、何の説明をしたのか、広げた分わかりづらくなっていると思った。

現状と課題の部分は、データや具体的な事例を多く紹介していただいたのがわかりやすいが、課題は何なのかということ踏まえて考え方と施策に行くと思う。例えば、

(1)の地域コミュニティをとりまく社会情勢変化では、少子高齢化、核家族化、単身高齢世帯の増加、自治会加入率、という課題かがタイトルとなっている。しかし、市民アンケートは、市民アンケートの項目がタイトルになっているので、なにが課題か文章を読み込まないとわからない。市民アンケートの結果、こういう問題が課題というように書くか、(1)と同じように、タイトル自体を課題とした方がポイントを把握しやすいし、こういう課題があるからこういう政策を打つ、となると見やすい。

同じように、(3)多様な主体の現状と課題も、これだけ多様ということを示す現状とともに、このような共通の課題があるとなっていると思う。最後に課題ということで、7点示しているが、せっきやく3つの大きなデータを出しているのだから、それぞれがこういう課題、統合してこんな課題があるというのがあると、組み立てとして、より次のところに繋がっていきやすいと思った。

また、Ⅲのタイトル、「地域活動の有機的な連携を促進するための基本的な考え」とあるが、考えというのは、個人的な思いという感じがする。方向性というか、方針というか、基本理念みたいなことかと思う。細かい語句の話だが、この位置づけは計画を立てていくための柱のようなものだと思うため、考えという言い方でなくてもいいのではないか。

また、ⅢやⅣは地域活動の有機的な連携を促進するという表現が使われているが、地域活動の有機的な連携はこの今回のキーワード、大きな柱のひとつだと思う。それが多様な主体の繋がりということと同義、クロスしてくる。有機的な連携が必要だからこういう計画を立てていると強調していくことも必要かと思った。

秋山委員：

有機的な連携という言葉が多く出てくる。有機的な連携というのは、協働とか、ともに協力し合っってというような言葉で、意味はわかる。ただ、有機的とはどのような意味かということが、私はよくわからなかった。

岩下委員：

前から比べて読みやすくなっていると思う。先ほども出たが、やはりⅠの（４）定義が、逆に見づらくなったという感覚を受けた。事務局の説明を聞いて、いろいろな人が主体性を持って欲しいということはわかったが、これを読んだだけで誰がやるのかというのが曖昧になってしまったと感じた。

また、Ⅰの（１）計画策定の背景と目的というところで、前回は高齢のことが書いてあったが、今回は減災・防災というところが強くなっている。減災・防災は繋がった後の副産物的なもの。繋がっているから、結果、そういうときに対応できたという話だと思いが、減災・防災のために繋がらましようというように読めてしまう。防災計画だったのかと感じてしまった。先ほど、有機的な繋がりとはなんだろうという発言があったが、連携は目的ではなく、そのための方法だと思う。まだ目的が定まりきってないというように感じた。

委員長：

皆さんの意見を聞いていると、全体の構成としては前回と比べるとかなりわかりやすくなり、繋がりが見えるようになったと。だからこそ、言葉の意味や内容について少し気になるという感じかと思って聞いていた。

前回も、コミュニティという言葉はどう捉えるかという議論が結構された。総合基本計画の中でコミュニティ活動という言葉があり、それを引き出してきて我々が議論しているというところがあるので、どうしても、これありきというように進んできた部分があると思う。先ほどの有機的という言葉もだが、なんとなくいいものという雰囲気はあるが、これを具体化しようとする、急に何かがよくわからなくなる。コミュニティはそういう部分もある。

私の意見だが、その中で、結局何からスタートしないといけないのかというときに、多様な主体と書いてあるさまざまな組織や個人というところからスタートせざるを得ない。現状こういう人たちや団体があり、これをどうするかというところがある。既にある団体や組織をどうするかというのが、具体的な方向性を考える上では重要かと思う。

先ほどの事務局の説明では、昭島市にこういう団体がこれだけあり、こういう活動をしているが、なかなか繋がれていない、もう少し一緒に何かをできたりすれば、というのがあ。一緒に何かをするときのそのやり方というのを対象にしている。

皆さんの話を聞いていると、（４）本計画におけるコミュニティの定義という題名は違うのかなとも思う。どちらかという、対象としてこの多様な主体の扱いを話題にしようとしている、というような意味合いで設定した方がいいのではないかな。何も知らな

いで読む人が、この計画は何について書いてあるのかという時に、コミュニティからスタートしてしまうと、コミュニティという言葉から、自治会を思い浮かべる人もいれば、市民活動を思い浮かべる人もいれば、サークル活動を思い浮かべる人、社会教育を思い浮かべる人、さまざま出てしまう。いろいろな言い方があるかもしれないが、今あるこの団体、組織、個人などを扱うという表現をした方が、何について言っているのか、何についての計画なのかということは、わかりやすくなると感じる。

大山委員：

地域の多様なコミュニティの例と書いたりするということか。

委員長：

コミュニティの例となると、コミュニティとは何か、となってしまう。もう既に活動している団体、自治会だろうが老人クラブだろうが子ども会だろうが、既に存在しているこれらの団体や主体を扱うということ。それをどうするかということこれから考えなければいけないし、どうあるべきかを考えなければいけない。既にあるこの団体をどうするのか。更にその中で課題として、担い手がいなくなっている、高齢化している、それなら次にどういう人たちが登場したらいいのかということも含めて議論をしていくというような、議論のフィールドを最初にお伝えしないといけないのではないか。これを読んだ市民の方は、コミュニティは何について語るのか、自分たちはその対象に含まれているかどうかわかりづらくなってしまいう意味合いで言った。

高橋委員：

(1) 計画策定の背景と目的のところ、地域を担う市民・民間団体・事業者・行政となっているが、ここだけ急に個人。コミュニティをどうするかという話をしているのに、どうしてここだけ市民になってしまうのかという点が疑問。

委員長：

ここはやはり主体を言っている。きっと、個人も組織もということに入れてる。

高橋委員：

民間団体もある意味、個人の集合体みたいなもの。

委員長：

市民という言葉も、いろいろな意味合いが込められている。単純に人というだけではなくて、おそらく主体的に地域に関わる個人という意味合い。住民と市民は違うということだと思う。

ここは難しく、主体というときにどうしても個人レベルと組織レベル両方入れたくなる。組織だけではとなるが、現実的に動いていくのはやはり組織。組織がないと、個人、本当の1人が何か活動をするというのは非常に難しい。どこかに所属をしたり、もともと何かに所属していたり、そういうものを意識しながら動くことが現実だと思う。個人と団体・組織とを一緒に入れているので、今の意見のように、レベル感の差を感じる方がいるのだと思う。地域の人に寄り添う個人として、民生委員や児童委員も入って

いるが、これも一応組織がバックにある。

2番目、3番目の議題とも繋がってくる話になるが、ひとつひとつ片付けていかないといけない。まずは、倉持委員からもご指摘があったように、レベル感を合わせたり、ボリューム感を検討する中で後ろに持っていったり、まとめたりという工夫は必要かと思う。特にアンケートの部分は、ここだけ流れをぶった切って入っている感じはある。資料編の中に入れていくことも含めて、整理をした方がいいという感じがする。そのあたりを修正・工夫することは前提として、構成そのものについては、このような形でもよろしいか。構成自体はこのような形で考えて進めたいと思う。

(2) 地域活動の有機的な連携を促進するための基本的な考えについて

【 事務局より説明 】

委員長：

「多様な主体のつながりから創る 互いに支え合う地域コミュニティ」という大きなテーマと、それをブレイクダウンした4つの方向性。まさに中身の話なので、ぜひ意見をいただければと思う。

伊藤委員：

減災・防災を基軸としたコミュニティ作りということで、防災の部分がだいぶクローズアップされてきている。岩下委員から防災計画みたいとだという意見もあったが、今、地域への関心として一番大きくアピールできるのは減災・防災なのかなという気がする。実際、先日の台風10号の際、消防団は田中町2丁目の水没してしまった地域で排水作業を行ったが、そこで感じたのは自然には勝てないなということ。ポンプを9台ほど回して排水を行ったが、入ってくる水の方がよほど多い状況で、隊員には長時間の活動をしてもらった。実際に浸水の被害に遭っている住民の方もいる。そこにいた人たちは、今後、減災・防災に対して非常に関心が高くなるのはまず間違いない。こういったところをひとつのアピールポイントにして、この計画を取りまとめていくのは良い方法なのではないかと私は考えている。

委員長：

まさに1番目に書いてある「地域への関心作り」については、防災などの皆さんの目の前で起こっているリスクに対して繋がらないといけない、ということについてはやはり説得力があると思う。

大山委員：

テーマの「多様な主体のつながりから創る 互いに支え合う地域コミュニティ」について、前回、多様な主体やコラボという話もしたりして、それを「つながりから創る」という表現にさせていただいたのだと思うが、それによって「互いに支え合う」というものに、若干違和感がある。「明るい地域コミュニティ」とかそのような表現でもいいかと思った。最終的な使命として、みんな一緒に楽しく地域のコミュニティができるとい

いよね、という話になってくれるといいと思った。

減災・防災のことも出ていたが、例えば、1行目のところを「一人ひとりが安全で安心して暮らせる地域、そして、減災・防災にも視点を置き～」とすると、減災・防災にズームが当たり切らずに済むかなと思った。また3つ目の、「自然災害など有事に備えるために～」となっている部分について、その下に「減災・防災を基軸としたコミュニティ作り」とあるため、ここの部分を先ほど言ったとおり、支え合うというより、共に繋がって何かを作り出すことで明るい地域作りを目指す、というような感じにしてはどうかと思った。

副委員長：

4つの項目の中にある「地域の関心づくり」と「誰もが参加しやすい仕組みづくり」という部分で、地域への関心が高まれば、主体的な地域活動への参加を促進していくことになるのだろうか、という疑問がある。必ずしもそうではないのではないか。

例えば、子どもの教育についてものすごく関心が高まったときに、自分たちが地域の中で子どもたちの生活をどうしていこうという主体的な関わりに結びつくよりは、むしろ、学校教育の中身に対して、こうあるべきだ、こうしてほしいという要求になるのではないかという気がする。もちろん、例にも入っている子ども食堂のように、子どもの生活や教育に関心を持って、活動として繋げているケースはたくさんあると思う。ただ、地域への関心作りから主体的な活動に行く、というのはどうなのだろうというのがある。

それから、参加しやすい活動ということで、例えばお祭りなどの地域の行事、特にコロナ明けの行事では参加者がとても増えていると思う。しかし、参加者は増えても、地域の行事を進めていく人たちはどれだけ増えているのか。繋がると言っても、出来上がったお祭りに来て観覧をする人というのは、その後なかなか繋がらない。お祭りを担っていく実行委員などになり、そこで一緒に舞台を作ったり、当日の運営をしたりして関わった人たちは、その後に繋がっていくことができる。そのため、参加しやすい仕組みづくりが、以降の主体的な活動の繋がりになるのかどうかと感ずる。

高橋委員：

今の住民は地域への関心が希薄。私は何回もこういう会議に出ているが、パブリックコメントでこういうのを作りました、どうですかと言ったところで、それに対して意見を言ってくれる人は非常に少ない。ということは、地域に帰っても、地域のことを思ってくれる人が非常に少ないということ。自分だけがよければいいという考え。先ほどのお祭りの話でも、お客で来る分にはいくらでも行くが、何か担当してくれと言うとそれは遠慮するという方が多い。今の人は得か損かしか言わない。これに入って何がメリットか、損か得かだけで生きる人が増えてしまった。昔みたいに義理と人情、努力してくれる人が少なくなってしまうということが現状だと思う。だから、それを少しずつでも変えていく、やっている我々もいかに楽しくやれるか。こっちは水は美味しいぞ

と言えるような運営の仕方をいかにしていくか。それに対して、行政はどう援助していけばそういう形になるか。今あるものをただ合わせれば何かができるというものではないと思う。今あるものをいかにもう一回盛り上げていけるようにするか、それが本来のコミュニティの作り方、あり方ではないかと思っている。

委員長：

難しい。これを見て、項目がなんとなく誰も反対できない、そうだよねという内容になっている。地域への関心づくりや、誰もが参加しやすい仕組みづくりと言われるとそうだよねと思うが、具体的にどうできるか、どうやったらそうなるのかというところでは、先ほど北村委員が発言されたように、みんなどうしてもお客さんになってしまうということがある。それに対して、高橋委員が発言されたように何かしないといけないし何とかしないといけないとなったときに、それをやるのは誰なのかということ。それがおそらく、多様な主体、ある意味、皆さんのような存在。地域のため一生懸命やってらっしゃる方々や組織。何をすれば、新しい担い手を増やしていったり、地域の人たちに関心を持ってもらったりして、最初はお客さんとしての参加かもしれないが、少しずつ主体的に関わるように変わっていくのかという部分の工夫だと思う。

前回、高橋委員が発言されていた、やぐらに子どもたちを乗せるという話のように、子どもに寄り添ったり、ゆるさのような話が、文言にないと思った。リーダーやコーディネーターという言葉も入れていかないとと思う。理想論を並べてしまって具体的に今地域で頑張っている方が何をしたらいいのかというのが、これだと見えてこないと感じる。

大山委員：

前回話していた、リーダーやコーディネーターというのがここで出てきていない。結果、誰がやるのかとなったときに、繋げたり、推進していったりするためのお手伝い役がいるということが、周知されるといいと思った。

関心づくりとしては、前回の会議では、例として高橋委員が自治会連合会で作成したお祭りマップなどがいいという話だったと思う。そういうものや、前のページに主体がつながる事例が出ているわけだから、こういうものを周知することで地域への関心作りや、いい意味で盛り上げみたいなのができるといいと思った。そのため、これについてはこのままでいいと思う。仕組みづくりや交流の場づくりというところで、リーダーを養成したり、コーディネーターをうまく活用したり、というような言葉が入ってくるいいと思った。

倉持委員：

皆さんのお話を伺って、「主体」という言葉は、言葉が混合するが、どういう団体や組織の種類があるという意味で使っている「主体」と、「主体性」という両面で、大きなキーワードになりそうだった。

また、4つの柱について。今の話の中で、私も担い手、リーダー、コーディネーター

の話が抜けていると思った。また、前半の3つは、まず入り口関心を作る、そして活動に参加してもらい、そしてそういう人たちが交流し合うというステップ、段階というようにイメージしやすかったが、最後の4つ目がこの構造では繋がらない。市の思いも大事だということはよくわかったので、別立ての柱なのかなとも思ったりした。

関心づくりのところは、市民性やシチズンシップみたいなのところだと思った。主体性ということとも関わって、関心を持ってもらうという言い方、そこに住んでいる一住民でもあるけど、一市民でもあるのだというか、感覚・意識を醸成し育てることからいろいろな活動に参加をしてもらう。それが地域側からの論理で書いてあるが、一人ひとりにとっても孤独感や孤立感の解消だったり、それぞれの生活課題が同じように地域の課題でもあったりするということのように、個の関心やニーズと、地域の課題が繋がっていくという段階が1段階目か2段階目なのかなと思っている。

そのように考えると、この最初のテーマ、「多様な主体のつながりから創る～」というのは、地域コミュニティなのか、繋がりを作るのか、繋がりを作るのか、どこにその柱、主が置かれているのかなと思った。その下の文章も「地域コミュニティを推進します」と書いてあるが、それを創ることが、住民一人ひとりの安全・安心もそうだが、豊かな生活、安心して暮らせる場だったり生きがいがいたり、自己実現なり、孤立しないというためにもなるし、地域の持続的な発展にも繋がっているのだという、そういう両面の視点があってもいいと思った。

高橋委員：

自治会を代表しているので、自治会の話。うちの自治会で夏に盆踊りを開催した時に、今回初めて子ども食堂にも出店してもらった。なぜかというとその中のメンバーに自治会員がいたから。そういう方が自治会にいてくれれば、他の団体とも自然と出会うことができる。ただ、それをある日突然、マッチングアプリではないけど、会ってここでイベントやるから参加しない？という、それはなかなかうまくはいかないだろうとは思っている。だから、まずは自治会に入ってもらって、その中でいろいろなものがあるというのを告知してもらえると、自治会の中の行事には参加しやすいというか、外部から他の人が来ても受け入れやすい。あの人をやっているものだから、どうぞ、というような感じ。子ども食堂に場所を貸しているだけで、子ども食堂をやっているわけではないが、そういった形で楽しいときには一緒にやりたいと向こうから自ら来てくれる。まずは形でもいいから、自治会に足を踏み入れていただくと自然と知り合いになれるということのひとつの例。

来住野委員：

やはり、コミュニティという言葉が難しいと思ってしまう。先ほど、明るい昭島という言葉が出てきたが、この計画で目標とするのは強い昭島なのかなというようにも思う。人と人とが繋がって地域の力が強くなっていく、というようなところを目指すのかなと思った。4つの柱として、地域への関心づくりや仕組みづくりが並列で書いてある

と、私は何かぼやっとしてしまったように感じる。ステップ1が関心づくり、それから仕組みづくり、というような段階みたいな形になるとわかりやすいかとも思った。

最初の方に戻ってしまうが、「地域を担う市民」と書いてあったところがわかりにくい。地域とは、担わないといけないものなのかと思った。そうではなく、高橋委員も発言していたように、小さな仲間作り、一緒にやろうよと言合えるようなところを、まずスタートとしてやっていかなければ、地域やコミュニティは広がっていかないだろうと思った。

大山委員：

Iの(1)計画策定の背景と目的の部分。「これらの課題にきめ細かく対応することは～行政の力だけでは限界があります。」と書いてあるが、すごく残念な話だと思う。あえて入れなくていいと思う。市民としては行政に頼りたい部分があるが、行政の力だけでは無理と宣言されてしまうのは。東日本大震災のころからこの言葉が出てくるようになったと思う。それまでは行政だけではできないというような話はなかったと思う。自分はこれがあまり好きではなくて、行政に頼りたい、駄目なものもわかっている、全部できないものもわかっているが、あえてこれを最初に宣言されて、みんなでやってくださいというのは違和感がある。

高橋委員：

高齢者、障害者、子育て、生きにくさを抱える方というように区分けする必要があるのか。困っている人、不安を抱えている人としてもいいのでは。差別とは言わないが、今の時代だととにかく私達は違うというニュアンスに取られてしまうかもしれない。あまり細分化しない方がいいのではないか。

大山委員：

逆説もあり、自分たちを入れてもらえないという意見も出たりする。すごく難しいと思う。

高橋委員：

それなら入れておいた方がいいか。私からすると避けているみたいな感じがしてしまった。誰でもみんな人類、みんなお友達ぐらいに謳っておけばいいのではないかと思う。

高田委員：

難しい。正直な意見として、私は別に地域の繋がりはいらんのではないかと思ってしまう。自分の人生だから、自分が楽しい人生を送りたいという考えがある。職場の中でも同じような考えをしている人が多く、仕事と自分のプライベートを両立することを考えているため、地域のためにとという考え方の人が少ない。だからどうしていいかわからないというのがある。

委員長：

すごく正直な意見だと思う。というのも、ここにいる皆さんは地域のためにいろいろ

とやってきている方なので、その必要性や、それをやることによって自分がどういうふうにプラスになるかというのを体感されている。しかし、高田委員が発言されたように、普通の人、地域に関心がなくてお客さんとして参加しているような人たちからすると、あまりにもハードルが高いし、別にそれに参加しなくても生きていけるというのが現実。でも、私たちからすると、やはりそれが必要というところもあるし、それをどうこの計画の中に入れていくかというのがすごく難しいと思う。

別の観点だが、活動をしていない人を引き込もうというような視点がすごく強いと感じる。一方で、委員の皆さんもそうだが、これだけ頑張っている人たちをちゃんと評価したり、この人たちが続けられるようにしたりするということもすごく大事かと思う。担い手が減っているから、どんどん新しい人を入れようというのもそうだが、今頑張っている人たちをこれからも頑張れるように、しっかりと支えるというようなこともとても重要だと思う。それも視点としてあった方がいいと思う。

岩下委員：

それに関連して、やはり情報発信がなかなかうまくできてないと思っている。社会福祉協議会の方でもいろいろな団体と関わりがあって活動をしているが、担当は知っていても、社会福祉協議会全体としては情報を知らなかったりする。係や課を超えて持っている情報を活用できない。それは社会福祉協議会の中だけではなくほかでもそうだと思う。例えば、自治会と子ども食堂がうまく繋がらないというのも、お互いにうまく情報発信ができてないからだとも思う。社会福祉協議会の広報や市の広報で情報発信となっても、紙面に限りがあったり、掲載できる内容に縛りが強かったりして、なかなか発信できない。今はインターネットでいろいろと調べられるので、自分に関心のあることは調べると思うが、自分に関心のない情報はどれだけ溢れていても目に入らない。どこかでコラボするとか、少しずつ興味が重なっていくような場面で発信できるような場所が必要。場所も必要だが、発信する方法を知らないということもあると思う。情報伝達の方法や、自分たちの活動を他の人にどうしたら伝えられるかをサポートする役割も必要だと思っている。

例として、民間の団体が子ども食堂をやっていたところ、子どもたちを集めてなにか悪いことでもしているのではないか、この団体は本当に大丈夫なのか、という連絡が入った。団体を正しく知らないから、そのようなことが発生したのだと思う。また、最近、社会福祉協議会では地域猫活動をしている団体と繋がった。子どもにもすごく人気が高く、ボランティアをしたいという声がある一方、その団体のせいで地域にいる猫がより増えてしまうのではないかというように認知されている方もいる。情報発信は、フォローしないとできないところもある。発信された情報がきっかけで繋がっていくところも増えると思う。もう少し強めに記載してもいいと思った。

副委員長：

私はどうしても、主体的に活動に参加してもらうにはどうしたらいいのか、に関心が

ある。

今まで、昭島の中で活動が活発になってきた経過として、市から行事や活動の内容が提供されるというのがあると思う。10月になると自治会を中心にして、ブロック別運動会、市民体育大会が実施される。市の事業を、地域の運動会として自治会に請け負ってもらってやりましょうというもの。それによって、一時期、地域の中でもものすごい盛り上がりが出てきて、多くの活動する人たちがそこから生まれてきたと思う。

また、ウィズユースが請け負う形で、子どもたちのスポーツ大会がある。ウィズユースが地域の子ども会に子ども会単位で参加をしてもらうもの。そのスポーツ大会に向けて、地域の大人と子どもが毎朝スポーツの練習をしている地域もあったし、そのスポーツ大会に子ども会で参加をするために、いろいろなお世話をする人たちがたくさん出てきた。

しかし、今では少しずつそれが負担になってきている。受ける側の団体の方で自分たちができる体制を超えてその事業を請け負うとすると、むしろ負担になって、その団体そのものが消滅してしまう、続かなくなってしまうということにも繋がる。ただ、活動を始めるきっかけとして、必ずしも行政からでなくてもいいが、こんなことをやっていこうという提案があって、それを納得して請け負う、強制的に受けるのではなくて、確かに必要だよなということを受けていく層が増えていく、そんな活動が展開されることが必要なのではないかという気がしている。

委員長：

「多様な主体のつながりから創る 互いに支え合う地域コミュニティ」というテーマについて、先ほど大山委員からも発言があったように、「多様な主体のつながり」と「互いに支え合う」という言葉はほぼ一緒だと思う。目指すべき姿みたいなものを表現する言葉にした方がいいと思う。

そうすると、多様な主体のつながりの中身。北村委員の話であつたりとか、この下に書いてあるさまざまな関心づくりとか仕組みづくりだったりとか、または、先ほど出たコーディネーターの話も含めて、地域の主体と呼ばれるさまざまな組織の繋がり方を提案、中心に描くという方が、まとまりがあるかなと、皆さんの発言を聞いて思った。

扱っているテーマが非常に広いので、皆さんから意見をいただいた中でも、個人のレベルの話、個人の意識の問題から、組織のあり方、担い手の話、コーディネーターの話、いろいろなものが混ざり合う。それに対して、全てのものに当てはまる計画を作るというのは、今日の議論を聞いていても非常に難しいと思う。

Iの(2)計画の位置付けに戻ると、総合基本計画の中での「コミュニティ活動の推進」のための主な取組でaが地域活動の推進と担い手の育成、bが地域活動の有機的な連携の促進、そしてcが地域活動の環境整備という中で、今回の計画はbに特化するという説明だった。そういう意味では、多様な繋がりと言っている中身について、ある程度そこに特化した形での表現、内容にした方が広がりすぎないのではないかと感じる。

もっと言うと、多様な主体の繋がりをもって、地域への関心作りをどうやるのか、多様な主体の繋がりによって、どういうふうに参加しやすい仕組みを作るのか、多様な主体の繋がりによって、地域を繋ぐ交流の場作りって何なのだろうか、そういうふうには絞込んだ方がいいような気がする。

私の考えをお伝えしたが、皆さんとしてはどうか。

先ほど高橋委員から、自治会と子ども食堂の連携がどう生まれたかという具体的な話があった。あれもひとつの例だと思う。今回は自治会の中に子ども食堂をやっていた方がいたから繋がったということ。ただ、それもおそらくどこかで、その方がこういうことやっているという話をしたということだろう。そういった情報の共有の話や、自分が何か活動していて、それを自治会の中で展開したらそういう繋がりが生まれるということもひとつの大きな事例。新たな繋がりづくりになる。

高橋委員：

無理してコーディネートしようとするのが難しい。前回も言ったとおり、例えば防災訓練に集まってもらい、顔見知りや知り合いになったりすることが、私はコミュニティだと思う。コミュニティ作りは個人だけではなく、全体を通して、皆さんがたまたま出会うというようなことが大切。子ども食堂のことも、会長同士が会って決めたわけではないし、たまたま子どものために料理を作ったことがあるという人が中にいけば、じゃあそれならお祭りでもやったらと言ったところ、それならぜひという話。

コミュニティというのは計画的にやっているわけではなくて、偶然の賜物。計画も大事だが、偶然やその出会い、ときめき、そういうものを大事にもらえたらいいと思う。だからこそ、誰もが参加しやすいというのは個人の話になってしまうし、コミュニティをコーディネートするというのは、団体同士の話になってしまう。個人を対象としているのか、コミュニティを対象にしているのか、そこを分けて考えた方がすっきりするのではないかな。今は何もかも詰め込んでいる感じがする。

大山委員：

自分が捉えていたのは、今、既存の団体はここにも出ていますとおりにたくさんある。それを多様な主体と言って、それはそれで認めていく。そして、これを知ってもらって、誰もがそこに行きやすくなる、その結果、それぞれが交流しながら、例えば一緒にやったら自治会いいねと言って入る人もいるかもしれない。そしてまた他方の活動に参加したいという人もいるかもしれない。そういう交流の場作りというところでのこの柱ができたのかと思った。そのため、ある意味望ましいような気がする部分もある。しかし、個人のあり方や捉え方もあったりするので、どうなのかという意見が出ているのだと思う。前回の話からすると、このような流れもありだろうと思うところ。

テーマについても「多様な主体からのつながりから創る～」というのは前回の話からだと思う。「創るコミュニティ」だといいいのではないかな。ここで二つ重ねてしまうと違和感がある。

高橋委員：

テーマをもう少し短く、半分に切れればいいと思う。こっちもあっちも、とじてしまっているが、みんな既に多様な主体。「皆さんがつながれるコミュニティ」くらいでいいのではないか。

大山委員：

だからこそ今まで、みんないろいろやっていて、みんな繋がり合えればいいよね、というような話だったと思う。

委員長：

先ほど偶然とか、ときめきとかいう話もあった。計画というと少し堅苦しくなってしまうが、そのような機会が増えれば、勝手に繋がる場所は繋がる。無理やり繋げようとしているわけではなくて、そのような場の中で、〇〇さん一緒にやれますよ、そうだね、やれそうですね、みたいな話が盛り上がっていけばいいだけの話。ただ、それは今まであまりなかった。今までは個人の努力で一生懸命繋がっていたけれども、もう少しそういう機会や場があったらいいということだと思う。

大山委員と同じことを言うが、全体を捉えようとするのではなくて、フォーカスするところ、この多様な主体と呼ばれているさまざまな団体や組織を繋げるということが、我々の一番の主題であるというところが、ある程度合意できれば、ぐっと絞り込まれるのではないかと思う。

コミュニティの話はそれだけではないと思う。先ほど言った個人の意識を変えていくという話もあると思うし、若い人からすると、もう少し緩くとか、そういう発想も大事だという話もちろん入ってくる。しかし、それを全部ひっくるめて話してしまうと、社会全体の話になってしまう感じもある。具体的に動かしていこうとすると、組織間連携というのも少し堅苦しいが、主体間連携のような話にある程度特化する計画として位置づけた方がいいような気がする。

具体的な施策の方向性について話をすると、少しイメージしやすくなるかと思う。皆さんのイメージと違和感があるものや、もう少しこういうものがあると参加しやすい、仕組みづくりがイメージしやすいなど、自分たちがやろうとしたらわかりやすいというような視点で見ていただきたい。

(3) 地域活動の有機的な連携を促進するための施策の体系について

大山委員：

交流の場作りのところに、コーディネートの推進は載っているが、前回話した生活支援コーディネーターや地域福祉コーディネーター、それぞれ介護福祉課と福祉総務課の管轄なので勝手に載せづらいかもしれないが、地域の課題を把握して、そのサービスや地域のボランティアの組織作りというところから携わる人たちなので、仕組み作りのところにコーディネーターの名前が出てきてもいいかなと思う。

岩下委員：

地域福祉コーディネーター、生活支援コーディネーターはサロンの推進の活動もしている。現在約130のサロンがあるが、もともとサロン活動をしていた人もいれば、市民に対してこういう活動があるという講座や、立ちあげるための講座を実施して、その受講者が実際にサロンを立ち上げたりしたことで、今のサロンの数を作ってきている。コーディネーターは、最初の関心作りから携わっている。しかし、やはり圧倒的に人数が少ない。現在、生活支援コーディネーターが2名、地域福祉コーディネーターは1名。生活支援コーディネーターは高齢分野を担当しているが、地域福祉コーディネーターは市民全体に対して1名しかいない。本当はもっと関わっていきたいところだが、マンパワーが足りてないところもある。そこに対しては、もっと増えたらいいなと市にも相談しているところ。役割としては関心作りから関わっていける。

社会福祉協議会ではコーディネーターについて委託を受けてやっているが、大山委員もコーディネーターとして活動している。地域にいろいろなコーディネーターがいると思う。そうした人ともっと繋がれるといい。そうした人たちはもっと地域にいるはずなので、その発掘というのも大事。

委員長：

そういう方は、ジャンルは違っても同じようなコーディネーターとして出会えば勝手に繋がる。そこが繋がるだけでネットワークは広がる。そういう場や機会があるだけでも、おそらく十分。

秋山委員：

施策の体系の一覧表、施策の方向性までは載っているが、その右側にもうひとつ具体例が書いてあると想像しやすい気がした。ただもうひとつの考えは、例えば「誰もが参加しやすい仕組みづくり」の「デジタル技術を活用した～」というところの右側にもうひとつ欄を作って、「ソーシャルネットワークを広める人」とかを具体的に出してしまうと、逆に狭まってしまふのかなという感じもした。しかし、この漠然とした方向性だと具体的にどんなことを考えたらいいいのかがわからない。自分はこれを読んだときにどう動けるか、自分が一市民として具体的に何しようかというのが少しわかりづらいと思う。

委員長：

どちらか難しいところ。

秋山委員

指示されればやりやすいが、指示されないと自分は何していいかわからないという主体性のなさが浮かび上がってそんな感じがした。

倉持委員：

先ほどの委員長のお話を聞いて、施策の体系が地域活動の有機的な連携を促進するための施策だとすると、例えば上に書いてある地域への誇りと愛着みたいな話は、地域活

動の促進や、地域活動に参加する人を広げる促進の話で、連携を促進するための施策の手前の手前ぐらいの段階での話もここに入っている。そうすると少し広い。もちろん中期的な連携をするための前提条件として、まずは参加する人を増やそうとスタンスでこれが入ってくるのはいいと思うが、あくまで柱は連携を促進するためにこれからどういう策が必要かということ。ファーストステップ、セカンドステップ、コーディネーター、情報、というような話になってくるとすると、ひとつひとつの項目の見方が変わってくるかなと思っている。

例えば地域の情報集約・発信も、連携するための情報の整理の仕方、集約の仕方、発信の仕方という話になってくるとなると、秋山委員がおっしゃっていた具体的な取り組みが少し変わってくるなど。そこの整理をした上で、この施策の方向性の整理が必要なのかなと改めて思った。

岩下委員：

この市民総合交流拠点でのモデル事業の実施はもちろんいい。しかし、やはりここだとエリアが限られてしまう。広域的な話ではないのかなというところで、市内全体を見て、例えば連携ということだと考えると、自治会とその近くにある社会福祉施設が共同して避難・防災訓練をするのはどうか。実際、うちの福祉作業所も昭島駅前上友自治会と一緒に避難・防災訓練をしている。地域の人たちと、実際にそこに住んではないが、福祉施設という資源があるので、連携をするというようなことを載せるのはどうか。

また、企業はここに全然見えてこない。企業もその地域にある資源で、今はより地域と繋がろうとしているところも多い。減災・防災というところだと、もちろん市民もそうだが、企業側も今とても関心を持って地域と関わろうとしているので、そういう視点も入れてもいいもではないかと思った。

委員長：

倉持委員の発言のように、主語が誰なのか、何なのかという話と、何のためのものなのかというところの絞り込みをした方がわかりやすい。具体的に何をしたらいいかというイメージが湧きやすいという感じはする。その上で、この項目そのものはそんなに悪くない気はする。

先ほど大山委員がおっしゃっていたように、具体例な話をすると、今、私のゼミで藤沢の団地の自治会のお手伝いをさせていただいている。普通のイベントだと出てきてくれない人が防災関係だと出てきてくれる。また、そのときにドコモショップと連携して、防災に関するアプリの入れ方、使い方講座も一緒にやった。さらにそこに大学生が関わっているので、まさに多様な主体の連携による地域の関心作り、そこに今ホットな防災というテーマが加わると、ちゃんと出てきてくれるし興味を持ってくれる。そういう意味では、地域の関心作りというような基本的な考え方も、その捉え方や切り口を変えれば、趣旨とうまく合うような表現になるのかと思う。

大山委員：

初めに記載のある「本計画は、bに特化した計画とします」というのをなくすと、もう少し窮屈じゃなくなると思う。それがいいか悪いかは別だが、総合基本計画での「コミュニティ活動の推進」のための計画としますという感じになると、倉持委員がおっしゃられたその前の前の段階というのも入ってきてもおかしくはない。

委員長：

逆にこっちをもう含んでしまう、と。その考え方ももちろんある。

大山委員：

関心づくりはすごく大事だなと思ったのが、高田委員が言ってくれたこと。みんなが一生懸命こんなに話したとしても、いや別に私は、となってしまう可能性はとても高い。みんなでやったから高田さんも来るでしょ？と言っても、いやごめんなさい私は、という可能性がある。若い人たちってそうかもしれないというのが如実に表れたすごい意見だったと思う。だから自分たちが懸命に話そうが何だろうが、出てきてくれた人たちに情報提供をしていかないといけないのだろうと思う。まず、地域の人たちに関心を持ってもらうのは大事だと思ったため、有機的な連携で行くのか、これを入れるのであれば、少し幅を広げるのも手かと思った。

委員長：

少しステップ的に考えていくと捉えることもできるし、場合によっては地域の関心作りというところに、ある程度絞り込んでもいい。そのための連携や、個人レベルの意識を醸成するようなことも含めてやるというのものもあるし、連携に特化するという形でもいい。皆さんからご意見をいただくといろいろなパターンが考えられてしまう。

大山委員：

多様な主体という言葉に違和感があるのであれば、みんなが繋がるとか、地域が繋がるとか、何かが繋がり合うみたいな表現にすると、フラットでいいかもしれない。また、絶対採用されないのはわかっているが、先ほどの高田委員の話を聞いて、若い人たちが興味を持ってくれるテーマは何なのかなと考えていた。例えば、「ちかっばー地域侵略大作戦」としたら、もしかしたら全然この計画を見てもなんとも思わない人が、何なのこれ、という感じで、見てくれる可能性もあるかとか考えていた。

若い人たちの目を引きそうなもの、高田委員にどういう計画だったら、どういう名前だったら見るのかというのを聞いてみるのもひとつの方法だと思う。このような計画は、その方向性や指針が現れながら、みんなが馴染んで見てくれるような名前がいいなと思う。今はふざけて言ったが、突拍子もない名前でも皆さん見てくれたりしないかなと思って、先ほどの高田委員の意見を聞いてからいろいろ考えている。

委員長：

以前、高田委員から、はたちのつどいの実行委員になかなか人が集まらないという話があったが、自分たちのことであってもわざわざそれを地域でやるっていうことは、興味がない人にとっては興味がない。その中でどうやるか。そのあたりの苦労があるとい

う話もあったため、本当にそこは難しいと思う。

大山委員：

20～25歳の人たちに出てもらおう計画として考えるのか、その人たちがさらに30～40歳になったときに出やすいような計画なのか、というのも自分の中で揺らいでいる。市民向けだから、まず全世代が対象となるのだと思いながらだが。

委員長：

皆さんそれぞれの視点があるからいろいろなパターンが考えられてしまう。これはおそらく決め切れないと思うので、ここはあえて事務局で決め打ちするしかないと思う。今回のこの計画、この位置づけからすると、ここの方向や視点で固めると言ってもらえないと思う。別にそれで何か否定されるとか、皆さんの意見が採用されないという意味ではないと思う。視点を定めたら、大山委員の話はこういうふうに取り込んでいける、高田委員の意見はこういうふうに入れ込める、という話だと思っていて、その軸は事務局で決めていただく。

いろいろな形でずっと議論されてきたので、中身としては多くの方の共感を得られるものになっている気がする。

大山委員：

基本的な考えが定まってくると施策の方向性はそんなにずれないと思う。秋山委員がおっしゃった、表の3列目があったりするとすごく見やすくなるのか。具体的な施策と言ってしまうとなので、考えられる施策みたいなもので、そういうのを載せていただきながら出来上がってくると、横並びで見やすくなりやすくなると思う。

倉持委員：

具体的な施策は、既存の施策を位置づけ直すのではなく、今考えている方向性を具体化するための新規事業や何をやるべき、ということか。

今日、少し具体的なものも出てきたような気がする。情報の話やイベントの話、リーダーとなる人の育成の話、交流の場づくりなどが出てきていると思うので、そのようなアイデア出しを会議の合間でするのがいいか。まずはアイデアを出す。向かおうとしているのはその繋がりを作るために何をすべきかということ。コミュニティ作りの繋がり、何をやるべきかということなので、そのアイデアを皆さんのそれぞれの背景やご経験、視点から出していただいて、それを事務局に集約していただく。そして次の会議までにそれを取りまとめて整理したものをまた検討するぐらいのスケジュール感かと。

委員長：

ここで皆さんと合意しておきたいのは、「多様な主体のつながり」は緩いものからきっちりとした座組も含めて、そういったものがこれからのコミュニティや昭島に必要という認識。それは皆さん合意できていると思っていいか。そこが崩れると全部崩れてしまう。そのような形で、今いる主体が、また新たな主体かもしれないが、繋がることが

大事だということ。それが小さな繋がりであっても、そこから広がっていくことは、皆さんの経験の中でなんとなくいいものだという感覚はあると思うので、それが共有できていればいいと思う。

3 その他

【 事務局より連絡事項を説明 】